

# マイノリティ・グループ・アイデンティティ

一人はいかにして自らに付与された差異を取り扱うか—

教育心理学コース 石丸 径一郎

Minority group identity: How do people handle their differences from others?

Keiichiro ISHIMARU

Studies on identity and adjustment of minority group members exist independently in each minority group. The author tries to integrate studies on various minority groups in the viewpoint of identity development. An integrated model of minority group identity development is proposed on the basis of studies from three fields(ethnic minority, sexual minority, visual impairment). From this integrated viewpoint, many minority group members can benefit from preceding studies of other fields.

## <論文目次>

- I. マイノリティとは
- II. マイノリティ・グループ・アイデンティティ
- III. 本レビューの目的と構成
- IV. 民族アイデンティティ研究
  - A. 民族アイデンティティの要素
  - B. 社会的アイデンティティ理論との関係
  - C. 文化受容(acculturation)
  - D. アイデンティティ形成の理論
- V. 他のマイノリティの研究
  - A. 性的マイノリティの研究
  - B. 障害者の研究
- VI. アイデンティティ発達モデルの統合
  - A. 共通性と統合モデル
  - B. 統合のメリット, デメリット
  - C. 各マイノリティ・グループの独自性
- VII. さいごに

## 引用文献

### I. マイノリティとは

本論文において扱うマイノリティとは、具体的に例を挙げると、民族的マイノリティ(黒人, アイス等), 性的マイノリティ(同性愛, トランスジェンダー等), 身体障害, 精神障害, 病者(特にハンセン病, AIDS等

の感染症), 非行少年, 外国人, 老人, 女性, 等々を想定している。「マイノリティ」とは日本語にすれば「少数者」であり, ごく素朴には「数が少ない者」という意味である。ただ「女性」や「少数の白人に支配される多数の有色人種」等をマイノリティとして捉える見方からすれば, 数の上で少ないわけではないので, 別の定義が必要になる。「数または力の少ないグループ」という括りならば, 数が多くてもマイノリティに含めることができる。

さらに踏み込んでみると, 冒頭に挙げた各グループにはもう少し共通点がありそうである。マイノリティとは何らかの差異や特異性を持つ存在である。その差異や特異性は, 多くはネガティブな意味付けをされている。社会的には, 差別や人権の問題が存在したり, 解放運動の対象になったりすることが多い。マイノリティを対象としたカウンセリングについて議論しているAtkinson, Morten, & Sue(1989)<sup>1)</sup>は, 「身体的・文化的特徴によって, 住んでいる社会の中で区別された不平等な扱いを受けており, 従って自身を集合的差別の対象となっていると考える人々」というものをマイノリティの定義として採用している。本論文でも, この定義に従って以下の論を進めることにする。

### II. マイノリティ・グループ・アイデンティティ

マイノリティ・グループは, 社会的な観点から見ると差別や人権の問題が存在しており, 解放運動の対象

になることが多い。なかでも公民権運動や、ウーマン・リブこと女性解放運動は、非常に大規模なムーブメントであり、一定の成果を収めている。一方心理的な観点から見ると、マイノリティは、その差異や特異性、強く言えば「スティグマ」と何らかの形で付き合っ生きていかねばならない(Goffman, 1963)<sup>2)</sup>。マイノリティであることを真っ向から引き受けて生きていく者もいれば、なるべくメインストリームに同化しようとする者もいるだろう。スティグマとの付き合い方ありようは、ある意味でマイノリティとしてのアイデンティティの状態そのものとも言える。

様々なマイノリティ・グループにおいて、アイデンティティの発達や社会適応、自尊心等との関係についての研究がなされている。マイノリティについての研究の流れは、そのマイノリティの解放運動の隆盛に大きな影響を受ける。例えば日本においては、1970年代に活発になった女性解放運動の影響を受けて、1980年代には「女性学」という研究分野が成立している(井上・上野・江原, 1994)<sup>3)</sup>。マイノリティ・グループのアイデンティティ研究として最も確立されているのは、社会運動としても他に先駆け、規模も大きかった民族的マイノリティの分野である。

Cross(1978)<sup>4)</sup>は、5段階の発達過程を想定した黒人についての民族アイデンティティ・モデルを提唱した。Parham & Helms(1981)<sup>5)</sup>は、Crossのモデルに若干の改定を加えて、黒人アイデンティティ態度を測定する尺度(Racial Identity Attitude Scale)を作成している。この黒人アイデンティティ研究の流れを拡張する形でPhinney(1989)<sup>6)</sup>は、黒人、ヒスパニック、アジア系という3つの民族についてのアイデンティティ発達モデルを提唱している。3年後に彼は、3つの民族に共通して使うことのできるアイデンティティ尺度であるMultigroup Ethnic Identity Measureを開発した(Phinney, 1992)<sup>7)</sup>。黒人のモデルをヒスパニック・アジア系に拡張適用したのと同様に、この民族アイデンティティ・モデルの知見は、他のマイノリティにも応用していくことが可能ではないだろうか。

これまで、性的マイノリティ、身体障害、精神疾患、感染症などのトピックに関する研究は、それぞれ独自に行われてきた。社会適応の良し悪しにはどのような条件が影響しているかということを中心にして、それぞれの領域でバラバラに研究が行われている状態である。確かにそれぞれのマイノリティにおいて特有な状況はあるのだが、マイノリティとして共通している部分も多い。「マイノリティ・グループ・アイデン

ティティ」という枠組みから統合モデルを作り、実証研究に活かしていくことはできないだろうか。実際、性的マイノリティや身体障害については、アイデンティティ発達モデルが提案されていないわけではない。しかしそれでも、研究のよく進んだ民族アイデンティティ研究の到達点から得られるものは大きいと考えられる。

### III. 本レビューの目的と構成

本レビューでは、先に述べたように様々なマイノリティ・グループについて統合的な視点を提供する「マイノリティ・グループ・アイデンティティ」モデルの提出を目指す。まず、マイノリティ研究の中でも一番進んでいると考えられる民族的マイノリティのアイデンティティに関する研究を概観する。次に、民族的マイノリティ以外の領域(具体的には性的マイノリティと視覚障害者)での関連する研究を挙げて、比較検討する。そして、マイノリティ間に共通する要素を抜き出してから、それをもとにマイノリティに関する統合的なアイデンティティ発達モデルの一案を提出する。最後に、この統合モデルだけでは見ることができないそれぞれのマイノリティの独自性を整理する。

### IV. 民族アイデンティティ研究

#### A. 民族アイデンティティの要素

マイノリティ・グループ・アイデンティティの具体的な要素を探るために、民族アイデンティティの要素としてどのようなものが想定されているかを挙げる。先述したように、民族アイデンティティにおいては測定尺度が作成されている(Parham & Helms, 1981; Phinney, 1992)ので、その項目からアイデンティティの具体的要素を知ることできる。

黒人、ヒスパニック、アジア系という3つの民族に共通のアイデンティティ・モデルを提案したPhinney(1990)<sup>8)</sup>の考えでは、以下のものが民族アイデンティティの構成要素となる。まず「自己ラベリング」は文字通り、自らのことを例えば黒人であると認識したり表明したりすることである。黒人というラベルを自分について用いるか用いないかは、黒人アイデンティティに関して最も重要な部分である。次に「所属感」は、ある民族に所属しているという主観的感覚をどの程度持っているか、ということである。これも民族アイデンティティの重要な要素である。「自らのグループへの

肯定的／否定的態度」については、同じヒスパニックでも、ヒスパニックというグループについて好意的に感じている者と、否定的な態度を持っている者がいる。この態度と関連するが「自らのグループへの積極的関与」も重要な要素である。使用する言語や、どのグループの友人が多いか、信仰する宗教、政治的な立場など、グループの社会への参加や文化的習慣が含まれる。より具体的なところで「自らのグループについての関心・知識」ということも民族アイデンティティの重要な指標となる。

B. 社会的アイデンティティ理論との関係

Lewin(1948)<sup>9)</sup>が最初のアイデアを出し、Tajfel & Turner(1979)<sup>10)</sup>が詳細に理論化した社会的アイデンティティ理論では、あるグループのメンバーであることは個人に所属感を与え、ポジティブな自己概念をもたらすとされる。しかし、マイノリティ・グループのメンバーであるという場合には、少し事情が異なる。マイノリティ・グループは、先に紹介した定義の通り、社会の中で区別された不平等な扱いを受けている。地位が低いとされているグループに所属することは、ネガティブな自己概念をもたらす可能性がある(Hogg, Abrams, & Patel, 1987<sup>11)</sup>; Ullah, 1985<sup>12)</sup>)。

Tajfel(1978)<sup>13)</sup>は、地位が低いとされるグループのメンバーは、様々なやり方で自己概念をポジティブなものにしようとしていると述べている。例えば「パッシング」というやり方を用いる者は、マイノリティ・グループを去り、メインストリームに同化したように振舞う。ただ、この手段はネガティブな心理的影響がある可能性が示唆されている。別のやり方としては、自らのグループへの誇りを育てるといったものがある(Cross, 1978)。自分が所属するグループは決して劣っていないと再解釈することで、自己概念がネガティブなものになるのを防ぐのである。

また社会的アイデンティティ理論によれば、二重民

族者の困難も予測されている。異なる2つのグループへの同一化は、態度、価値観、行動などに葛藤を引き起こすと考えられる(Der-Karabetian, 1980<sup>14)</sup>; Salgado de Snyder, Lopez, & Padilla, 1982<sup>15)</sup>)。この場合は、2つのうち一方のアイデンティティを選ぶか、biculturalという新たなアイデンティティを確立するか、ということになる。

C. 文化受容(acculturation)

文化受容(acculturation)とは、異なる文化との接触によってもたらされる文化的な態度・価値観・行動等の変化のことである。民族アイデンティティは、自文化とメインストリームの文化との接触によって成り立つものなので、文化受容の文脈の中で議論することができる。

文化受容には、1次元モデルと2次元モデルとの2種類のモデルが提案されている。1次元モデルにおいては、民族アイデンティティは自文化への強い結びつきから、異文化への強い結びつきまでの、1次元軸上の位置によって表される(Ullah, 1985; Andujo, 1988<sup>16)</sup>)。このモデルでは、片方へのコミットが強まると、もう一方へのコミットは弱くなる、ということが前提とされている。一方、2次元モデルにおいては、自文化への結びつきとメインストリームの文化への結びつきとは独立であるとされている(Berry, Trimble, & Olmedo, 1986)<sup>17)</sup>。このモデルにおいては、自文化とメインストリーム文化の両方に強い同一化をすることもできるし、どちらにも同一化しないこともありえる。このモデルでは4種類の状態が存在することになる。このモデルを表1に示す。表中の+はコミットメントや同一化が強いことを、-は同じく弱いことを表す。

自文化とメインストリームとの両方にコミットしている「統合」と呼ばれる状態は、最も良い適応を示すことが、実証的研究から明らかになっている(Berry, Kim, Minde, & Mok, 1987)<sup>18)</sup>。

表1 文化受容の2次元モデル (Berry et al., 1987)

	統合	分離	同化	周辺化
優勢文化	+	-	+	-
自文化	+	+	-	-
	一番良い適応。	ゲッターや分離校では、良い適応。	外見の問題。自グループからの制裁も。	自尊心が低い。

また、メインストリームの文化に強く同一化し、自文化にはほとんどコミットしない「同化」と呼ばれる状態は、外見の問題が重要になる。ヨーロッパからアメリカへの移民など、あまり外見が目立たない場合は、自尊心へのネガティブな影響はないと考えられる。しかし、黒人やアジア系など、外見的に目立つ場合は偏見や差別の対象となる可能性がある。また、自分の民族のグループのメンバーから裏切りとみなされて、制裁を受けることもありえる。同化の状態にある個人には、これらの問題をどのように扱うかということが、適応に関する重要な要因になる。

自文化だけに強く同一化する「分離」と呼ばれる状態は、ゲットーなどで見られ、サポート的な民族コミュニティの中で、高い自尊心を示す。例えば、分離校に通う黒人の子どもは、黒人と白人が一緒に通う学校の黒人の子どもよりも高い自尊心を示すという結果がある(Rosenberg & Simmons, 1972)<sup>19)</sup>。

自文化とメインストリーム文化とのどちらにもコミットしない「周辺化」と呼ばれる状態は最も適応の悪いとされる状態である。例えば伝統文化を失ってしまったインディアンで、メインストリームにも入っていけない者などが例として挙げられる。

#### D. アイデンティティ形成の理論

民族アイデンティティは、時間の経過と共に変化していくものである。発達的な視点を提供してくれるのはErikson(1968)<sup>20)</sup>の自我アイデンティティ発達モデルである。EriksonのアイデアをもとにMarcia(1966<sup>21)</sup>, 1980<sup>22)</sup>)によって定式化された発達段階は、探索もコミットもしていない「拡散」、探索を伴わないコミットが特徴で、親の価値観をそのまま受け入れている「予定アイデンティティ」、探索しながらもまだコミットできないでいる「モラトリアム」、探索の期間を経たのちに

強いコミットをしている「アイデンティティ達成」の4段階である。

民族アイデンティティの形成も、自我アイデンティティの形成と似た経過をたどるとPhinney(1990)は述べている。先に述べた、Cross(1978)の黒人のアイデンティティ発達モデルと、Phinneyの黒人、ヒスパニック、アジア系共通の民族アイデンティティ発達モデル、さらにMarciaの自我アイデンティティ発達モデルとを対照させて表2に示す。

民族アイデンティティの発達過程をまとめると、以下のようなになるだろう。まず、自らの民族について未探索の状態、その中でも民族に関心がない場合は民族アイデンティティは「拡散」となる。また、自分で民族の文化について探索したわけではなく、親などの他者の意見に依存している場合は、未探索の「予定アイデンティティ」となる。その後、民族について目覚めるきっかけとなる「出会い」がある場合もあるし、それほど明確な「出会い」がない場合もある。いずれにしろ、自らの民族について探索をし始めることになる。探索(「モラトリアム」)の段階では、自分にとっての民族の意味を理解しようと探求する。その後、「アイデンティティ達成」の状態に達した者は、自分の民族性に関して、明確で自信のある感覚を得ることができる。

#### V. 他のマイノリティの研究

##### A. 性的マイノリティの研究

性的マイノリティには、同性愛・両性愛など性的指向のマイノリティや、トランスジェンダー(性同一性障害を含む)と呼ばれる性自認のマイノリティ、インターセックス(半陰陽を含む)と呼ばれる身体的性別に関するマイノリティがある。この中では、同性愛に関するアイデンティティ研究が最も進んでいる。

表2 民族アイデンティティに関する発達の視点

Marcia(1980)	Cross(1978)	Phinney(1989)	
自我アイデンティティ	黒人	黒人, ヒスパニック, アジア系	
拡散		拡散	
予定アイデンティティ	出会い前	予定アイデンティティ	未探索
アイデンティティの危機	出会い	探索	
モラトリアム	没頭-出現	(モラトリアム)	
アイデンティティ達成	内在化	アイデンティティ達成	

Cass(1984)<sup>23)</sup>は、同性愛者男女のアイデンティティ獲得の6段階モデルを提案し、その妥当性を検討した。このモデルは、「アイデンティティの混乱(自分の同性愛的な関心や行動に気づくことで混乱する段階)」、「アイデンティティの比較(同性愛者と自分とを比較し、その違いが徐々に明らかになっていく段階)」、「アイデンティティへの寛容化(社会的・性的・情動的な必要性を満たすために同性愛コミュニティを探索する段階)」、「アイデンティティの受容(同性愛文化との接触が増えることで、同性愛をよりポジティブに見るようになる段階)」、「アイデンティティへの誇り(同性愛者としての自分に満足を感じる段階)」、「アイデンティティの統合(同性愛者であることが自分のアイデンティティの中に統合されていく段階)」の6段階からなる。ただし、第1段階と第2段階、また第5段階と第6段階を明確に区別することはできないという結論を出している。

Troiden(1989)<sup>24)</sup>も類似した4段階モデルを提出している。それは、将来の同性愛者としての自分を考えていく上で土台となるものが作られていく思春期以前の「鋭敏化」の段階、自分の感情・行動が同性愛者のものと同じかもしれないということに気づき混乱していく「アイデンティティの混乱」の段階、他の同性愛者と接触を持ち始めて、自身をとりあえず同性愛者と定義し始める「アイデンティティの受容」の段階、同性愛を人生のあり方として採用し、満足感を感じる「コミットメント」の段階である。

日本での数少ない研究の1つとして、堀田(1998)<sup>25)</sup>は学生相談の現場から、「混乱期」「混乱から受容へ」「受容期」という3段階の同性愛アイデンティティ形成をサポートしていく心理面接を提案している。

同性愛アイデンティティと民族アイデンティティとの関連を探った研究として、Walters & Simoni(1993)<sup>26)</sup>がある。この研究では96人の同性愛の男女が、Rosenberg(1965)<sup>27)</sup>の自尊心尺度と、Parham & Helms(1981)の黒人アイデンティティ尺度RIASを記入した。RIASは実施するにあたって“Black”を“Gay or Lesbian”に、“White”を“Strait”に置き換えた。その結果、自尊心との相関は、黒人の場合とほぼ同様の結果が得られている。

## B. 障害者の研究

障害者の研究にも、アイデンティティと関わりの深い観点を持つものがある。Schroeder(1996)<sup>28)</sup>は、8人の視覚障害者に対し、点字使用のを中心にインタ

ビューをして質的研究をおこなった。インタビューの対象者には、点字がまったく読めない人、少しだけ読める人、自在に読みこなせる人など様々な段階の人がいた。また、視力障害の程度については全盲の人も多少視力の残っている人もいた。その結果、視覚障害者にとって点字は、有能感・平等・独立などに結びついたものであり、単にコミュニケーション・ツールという以上の意味を持つものであるという結論に達している。自分を盲人であると認識するかどうかは、残っている視力の程度とはあまり関係がなく、それよりも点字を使うかどうかの方が関連が深かった。点字使用者は、視力が少し残っていても自らを「盲人」と認識し、点字をスティグマの克服や有能感・自立の象徴と捉えている者が多かった。一方、点字非使用者は、視力障害があるが自分は晴眼者であると認識し、適応方略として「パッシング」、つまり視力障害がないかのように振舞うことを採用している者が多かった。

Schroederは、この現象をマイノリティ・グループへの同一化であるとし、「より正常に近いこと」をよい適応の基準とする医療モデルと、「差異を持っていることは能力や価値がないことを意味しない」とする障害者の人権・独立生活パラダイムとの対比で説明している。

## VI. アイデンティティ発達モデルの統合

### A. 共通性と統合モデル

ここまで民族的マイノリティ、性的マイノリティ、障害者についてのいくつかの研究を見てきた。マイノリティのアイデンティティを統合的に考えるために、様々なマイノリティに共通する要素を挙げる。

まず、マイノリティをメインストリームと分け隔てている差異・特異性・スティグマの存在は、どんなマイノリティにも共通している。そして、メインストリームとは異なる自分をどのように受容していくかという問いも共通のものである。この差異・特異性・スティグマをどのように認識し、どのように扱ってどのように他者に提示するか、ということについて逡巡し選び取る過程が、マイノリティ・グループ・アイデンティティの形成過程そのものと言える。次に、いくつかの研究について、このマイノリティ・グループ・アイデンティティの発達段階を見てみると、未探索、出会い、モラトリアム、達成、という共通の発達段階を抽出することができそうである。

以上の議論から、マイノリティ・グループ・アイデンティティの典型的な発達過程について、次のような

統合モデルを提示することができそうである。

- ①未探索・マジョリティ的態度：まだ自分の持つ差異や特異性に気づいていなかったり、気づいていても特に向き合うことなく過ごしている状態である。価値観や態度は、マジョリティのものをそのまま受け入れている。このマジョリティ的態度は、将来自分の差異や特異性と向き合う時に葛藤が起こるような考え方の基盤を形成しつつある。なお、他者の価値観をそのまま取り入れていることが特徴の予定アイデンティティも、広い意味でこの段階に含める。
- ②差異への気づき・差異の出現：差別や偏見を受ける体験や、自分の持つマイノリティ性とマジョリティ的価値観との不協和によって、自分の差異や特異性と向き合い始める。何かドラマティックな体験を伴う場合もあるし、徐々に蓄積されてきた違和感や不協和によって、だんだんと向き合う形になる場合もある。また、中途障害のように、突然に差異が出現して、心の準備もないまま向き合わざるを得ない場合もある。この段階は、一定期間持続する状態というよりも、転換点を表している。
- ③同一化の開始・逡巡：自分の持つ差異や特異性と向き合っていて考えていく中で、徐々にマイノリティ・グループへの同一化を始める段階である。同じマイノリティ・グループに属するメンバーとの交流が活発になったり、グループの文化や価値観を取り入れ始める。ただし、すんなりと同一化に向かう者もいれば、同一化に対してかなり逡巡する者もあり、個人差は大きい。
- ④自己受容・安定したグループ観：マイノリティとしての自分自身をポジティブに受け容れ、自らの属するグループに誇りを持っている状態である。自分のマイノリティ・グループの文化と、メインストリームの文化との両方にポジティブな価値を見出すことができ、どちらかに極端に肩入れしたりせずとも、あるがままの有りようを受け容れることができる。もっとも安定した社会適応を示す。

## B. 統合のメリット、デメリット

様々なマイノリティのアイデンティティ発達を統合的に見る視点を提示したが、このように統合的に見ることによって、どんなメリットとデメリットがあるだろうか。まず、統合的に見るメリットとして、次のようなことが挙げられる。

これまで障害者、性的マイノリティ、感染症などそれぞれの分野で、社会適応の良し悪しに関連する条件

について研究が行われてきた。そこに、この統合的なモデルによる発達の観点を導入することにより、「発達段階ごとの」適応のための条件を探ることができるようになる。おそらく、未探索の状態にある人と、同一化の開始・逡巡の時期にある人とでは、適応状態をよくするために必要なことは違ってくるだろう。例えばWalters & Simoni (1993)は、「同性愛を治してほしい」といった訴えは典型的な〈出会い前〉の段階のものであり、これは自らのグループへのネガティブな態度によるものであって、後の段階に進めば違う考えを持つようになる可能性が高いことを、カウンセラーは知っておくことができる、と述べている。

次に、差異のマネジメント方略の一般化というメリットが挙げられる。マイノリティの研究は、それぞれの分野で独自に行われているため、各分野間での情報交流があまりない。先にも述べたように、民族的マイノリティの研究は歴史も古く、最も確立されているといえる。研究の歴史の浅いマイノリティ・グループは、一から研究を始めなくとも、先行している分野の研究の到達点から学べるものが多くあるはずである。

また、統合的に見ることによって、心理臨床活動の観点から見ても有用なことがある。マイノリティ・グループは、偏見や差別の対象となり特殊なストレスにさらされることが多いので、臨床的に見てもハイリスク・グループの1つである。しかし、マイノリティ・グループといっても様々な種類があり、その全てについて詳しく知っておくことは不可能である。その時、このような統合的なアイデンティティ発達モデルを知っておけば、典型的なマイノリティのメンバーがたどる心理状態のイメージを持つことができ、アセスメントと対応方針を立てやすくなるだろう。

一方、アイデンティティ発達を統合的に見ることによるデメリットとしては、次のようなことが挙げられる。

様々な種類のマイノリティ・グループは、それぞれの差別や偏見を受けてきた歴史があり、話題にすることは非常にデリケートなところがある。そこで、この統合モデルのような考え方を提示すると、他のマイノリティと一緒にひと括りにされることへの反発が起こる可能性がある。例えば、同性愛は以前、精神障害の1つとみなされていたが、これが1980年に精神障害の診断基準から外されたのは、「同性愛は精神病ではない」という当事者たちの主張によるものであった。確かに現在では、同性愛は治療を要するような種類の現象とは考えられていないので、精神障害の診断基準に収

載されているのはおかしなことではある。ただし、精神病といっしょにされたくないという気持ちには、精神病というマイノリティ・グループに対する偏見が含まれている可能性があることも忘れてはならないことである。

また、別のデメリットとしては、マイノリティ・グループにはそれぞれ個別の特殊な状況があり、「マイノリティ」として括りきれない部分を見落としてしまう可能性がある。次節で、各マイノリティ・グループの独自の事情についてまとめる。

### C. 各マイノリティ・グループの独自性

民族的マイノリティの独自性：民族的マイノリティの最大の特徴は、ほとんどの場合家族のサポートが得られるということである。家の外に出ればマイノリティであるが、基本的に家族は同じ民族であるので、家庭の中で心理的なサポートを受けたり、メインストリームとの違いをうまくマネジメントする具体的な適応方略などを教えてもらったりすることができる。次に、多くの民族的マイノリティは外見的に目立つということがある。見るだけで何の民族かがほぼわかってしまう。そのため、差異のマネジメント方略としてパッシングは非常に使いにくいということになる。ただしその代わり、ある民族に属するということが一目でわかるので、同じ民族の者と交流するのが容易であり、グループ同一化をしやすいというメリットにもなりうる。また、二重民族者Biracialが存在し、特有の状況や困難を抱えていることも、民族的マイノリティの独自性といえる。

性的マイノリティの独自性：性的マイノリティの中でも本論文で扱った同性愛の独自性として、家族のサポートが得られないことが多いということが挙げられる。性的マイノリティの持つ差異は、非常にプライベートな領域に存在し、社会的には独特のタブー性を付与されているので、民族的マイノリティとは逆に、家族に打ち明けてサポートを得ようとするのは非常に難しい。Gibson(1989)<sup>29)</sup>は、「ゲイやレズビアンは、自分の家族から完全な拒否を受け、サポートを受けられる見込みもまったくない唯一のグループである。」と述べている。次に、外見によってマイノリティかどうかを判別することがほとんど不可能なことも大きな特徴の1つである。そのため、差異のマネジメント方略としてパッシングが第1に選ばれることが多い。ただしパッシングは、ごく身近な人に対してまで絶えず自分を隠し続けるということなので、心理的な

負担がかかる可能性がある。また、性的マイノリティには両性愛Bisexualという場合もありうる。民族的マイノリティのBiracialの場合と同様に、グループへの同一化の差異に困難を抱える可能性がある。

障害者の独自性：障害者の場合、「中途障害」がありうるというのが大きな特徴である。何の前触れも心の準備もなく突然生活が一変してしまうことが起こりうる。民族的マイノリティや性的マイノリティでは、青年期の自我アイデンティティの確立と、マイノリティ・グループ・アイデンティティの確立とが並行して進んでいく。しかし、成人期も後期になってからの中途障害は、アイデンティティを組み直すかなり大規模な作業になるだろう。また、民族的マイノリティや性的マイノリティでは、マイノリティだからといって実際に能力的に何かが劣るわけではないが、障害者の場合、生活上1人ではできない部分が出てきて、実際に能力に関わってくる。その分、自己受容は他に比べて難しい可能性が考えられる。

### VII. さいごに

これまでマイノリティの研究は、それぞれの分野で独自に行われてきた歴史があった。それは特に、精神疾患や感染症などの分野では顕著であり、それぞれの分野で、社会適応への条件を探っていた研究が多かった。しかし、民族的マイノリティや性的マイノリティの分野で行われているアイデンティティの発達過程の研究は、全てのマイノリティ・グループ研究に寄与する可能性を備えている。様々なマイノリティにおいて、アイデンティティ発達過程の発想を取り入れ、他のマイノリティ研究の到達点から応用できることを学ぶことができるようになれば、マイノリティの適応に関する研究は、より実践的で寄与の大きいものになっていくと考えられる。

(指導教官 下山晴彦助教授)

### 引用文献

- 1) Atkinson, D. R., Morten, G., & Sue, D. W. 1989 *Counseling American minorities: A cross-cultural perspective* (3rd ed.). William C. Brown.
- 2) Goffman, E. 1963 *STIGMA: Notes on the management of spoiled identity*. Prentice-Hall. 石黒毅(訳) 1973 *スティグマの社会学—傷つけられたアイデンティティ* せりか書房

- 3) 井上輝子・上野千鶴子・江原由美子(編) 1994 リブとフェミニズム 岩波書店
- 4) Cross, W. E. 1978 The Cross and Thomas models of psychological nigrescence. *Journal of Black Psychology*, 5, 13-19.
- 5) Parham, T. A., & Helms, J. E. 1981 The influence of Black students' racial identity attitudes on preferences for counselor's race. *Journal of counseling psychology*, 28(3), 250-257.
- 6) Phinney, J. S. 1989 Stages of ethnic identity development in minority group adolescents. *Journal of early adolescence*, 9, 34-49.
- 7) Phinney, J. S. 1992 The Multigroup Ethnic Identity Measure: A New Scale for Use With Diverse Groups. *Journal of adolescent research*, 7(2), 156-176.
- 8) Phinney, J. S. 1990 Ethnic identity in adolescents and adults: Review of research. *Psychological Bulletin*, 108(3), 499-514.
- 9) Lewin, K. 1948 *Resolving social conflicts*. Harper
- 10) Tajfel, F., & Turner, J. 1979 An integrative theory of intergroup conflict. In W. Austin & S. Worchel (Eds.) *The social psychology of intergroup relations* (pp. 33-47). Brooks/Cole.
- 11) Hogg, M., Abrams, D., & Patel, Y. 1987 Ethnic identity, self-esteem, and occupational aspirations of Indian and Anglo-Saxon British adolescents. *Genetic, social, and general psychology monographs*, 113, 487-508.
- 12) Ullah, P. 1985 Second generation Irish youth: Identity and ethnicity. *New Community*, 12, 310-320.
- 13) Tajfel, F. 1978 *The social psychology of minorities*. Minority Rights Group.
- 14) Der-Karabetian, A. 1980 Relation of two cultural identities of Armenian-Americans. *Psychological reports*, 47, 123-128.
- 15) Salgado de Snyder, N., Lopez, C. M., & Padilla, A. M. 1982 Ethnic identity and cultural awareness among the offspring of Mexican interethnic marriages. *Journal of early adolescence*, 2, 277-282.
- 16) Andujó, E. 1988 Ethnic identity of transethnically adopted Hispanic adolescence. *Social work*, 33, 531-535.
- 17) Berry, J., Trimble, J., & Olmedo, E. 1986 Assessment of acculturation. In W. Lonner & J. Berry (Eds.) *Field methods in cross-cultural research* (pp.291-324). Sage.
- 18) Berry, J., Kim, U., Minde, T., & Mok, D. 1987 Comparative studies of acculturative stress. *International migration review*, 21, 491-511.
- 19) Rosenberg, M. & Simmons, R. 1972 *Black and White self-esteem*. American Sociological Association.
- 20) Erikson, E. H. 1968 *Identity: Youth and crisis*. Norton.
- 21) Marcia, J. 1966 Development and validation of ego-identity status. *Journal of personality and social psychology*, 3, 551-558.
- 22) Marcia, J. 1980 Identity in adolescence. In J. Adelson (Ed.) *Handbook of adolescent psychology* (pp.159-187). Wiley.
- 23) Cass, V. C. 1984 Homosexual identity formation: Testing a theoretical model. *Journal of sex research*, 20, 143-167.
- 24) Troiden, R. R. 1989 The formation of homosexual identities. *Journal of homosexuality*, 17, 43-73.
- 25) 堀田香織 1998 男子大学生の同性愛アイデンティティ形成 学生相談研究, 19(1), 13-21.
- 26) Walters K. L. & Simoni, J. M. 1993 Lesbian and gay male group identity attitudes and self-esteem: Implications for counseling. *Journal of counseling psychology*, 40(1), 94-99.
- 27) Rosenberg, M. 1965 *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 28) Schroeder, F. K. 1996 Perception of braille usage by legally blind adults. *Journal of visual impairment & blindness*, 90(3), 210-218.
- 29) Gibson, P. 1989 Gay male and lesbian youth suicide. Report of the Secretary's Task Force on Youth Suicide (pp. 110-142). U. S. Government Printing Office.